

# コロナ感染症と子どもたち 小児科診療室から

## 多方面におよぶコロナ関連被害

子ども白書編集委員 内海裕美

2019年12月、中国の湖北省武漢市で「原因不明のウイルス性肺炎が相次いでいる」と発表があり、1月23日武漢市で封鎖が始まりました。日本では2010年1月16日に初めての感染が確認され、2月13日国内初の死亡者が出ました。3月下旬以降に感染者が急激に増加し、5月17日には日本国内での累計感染者数が1万6285人で、死亡者数744人となっています。3月2日から全国一斉休校の要請が出され、5月現在も一部の地域を除き休校状態が続いています。毎日ニュースで報道され、家庭の中でもマスク、手洗いなどを促され（時には、手を洗わないとコロナにかかるかと脅され）心理的なストレスから食欲不振、腹痛、イライラしているなどを訴え、医療機関を訪れることも少なくありません。

### 新型コロナウイルス感染症、子どもは軽症？

5月13日、新型コロナウイルス感染症で28歳の力士が死亡しました。20代以下の死亡は初めてです。子どもの感染者数は少なく軽症例ばかりで、この原因はわかっていません。中国からの報告でも子どもは軽い風邪症状で1～2週間で回復する、感染しても無症状のまま経過するとされています。5月14日現在、最も感染者数の多いアメリカ（感染者数139万764人、死亡者数8万4136人）ですが、中でも34万人が感染し約2万2000人が死亡しているニューヨーク州でも、子どもが重症となることは少なく、入院者の1%未満だと報告されています。しかしながら、ニューヨーク州内では、川崎病に似た症状を起こした子どもが102人で7割が集中治療室に入り、3人（5歳、7歳、18歳）が死亡したと報告しています。5～9歳が29%、10～14歳が28%を占めており、従来の川崎病の年齢層より高いこともわかっています。このように小児科領域では、この感染症が子どもたちにどのような影響を与えるのか不明なことが多いのが現状です。

小児に関する最新のデータでは、コロナによる小児死亡数を7か国（米国・英国・イタリア・フランス・ドイツ・スペイン・韓国）の公文書をもとにまとめた報告が出ています。小児コロナ感染者4万2846例中、死亡は44例（0.77/10万）。同期間の全小児死亡数は1万3200例（9.62/10万）で、予期せぬ外傷が1056例、下気道感染症が

308例、インフルエンザが107例と報告されています。小児にとってはインフルエンザの方が罹患しやすく死亡率も高いと言えるでしょう。このデータは、小児を対象とした行動制限などの施策を検討する上で参考になると考えられます。日本小児科学会も、発達途上にある子どもたちへの社会的な隔離についての問題提起をしています。

### 日常的な医療を保障できなくなる医療崩壊

日本は、国民皆保険でフリーアクセス（どこでも好きな医療機関にかかること）が保障されています。少子化でありながらも数百グラムの命を救っている日本、世界一速いスピードで高齢化社会になっているのもこういった医療保険制度に寄るところが大きいのです。しかしながら、新型コロナ感染症のように、感染者のピークの山が大きくなり、相対的に重症者が増えれば、病院のベッドはその対応に費やされ、物的・人的資源はそれに注ぐことになり、日常的な医療を保障することが不可能になってきます。これが医療崩壊です。医療崩壊が起きれば、国民の命と健康を守ることが崩壊することになります。

### 標準的な感染予防策を継続する必要性

従来から医療や介護の現場では、「人の血液、体液、分泌液、損傷のある皮膚・粘膜は感染性病原体を含んでいる可能性がある」という原則のもとに行われる具体策があります。それぞれの感染経路を遮断するためのマスク、手袋、手指衛生（手洗い）であり、時には防護服、ゴーグルなどが加わります。こういった専門分野でなく、普段の生活でも、他人の血液には直接触れないこと、こまめに手を洗うこと、咳エチケットなどが啓発されてきました。日本での感染者数が諸外国と比べて少ないのは、自粛要請、3密（密閉、密集、密接）を避ける行動などととも、日頃の感染予防策も効果を発揮していると考えられます。

インフルエンザ流行期の冬場にマスクをつける習慣はあってもこれからの暑い時期にマスクをつける習慣はなく、低年齢の子どもたちが日常的にマスクをつけることもありません。マスク着用のまま体育をやって死亡した中国の例もあるように、何が起きるかわからない状況です。情報を収集し、想像を超える事故・事例が起きた場合は速やかに対応を取る必要がありますが、この生活習慣は今後継続しなければなりません。

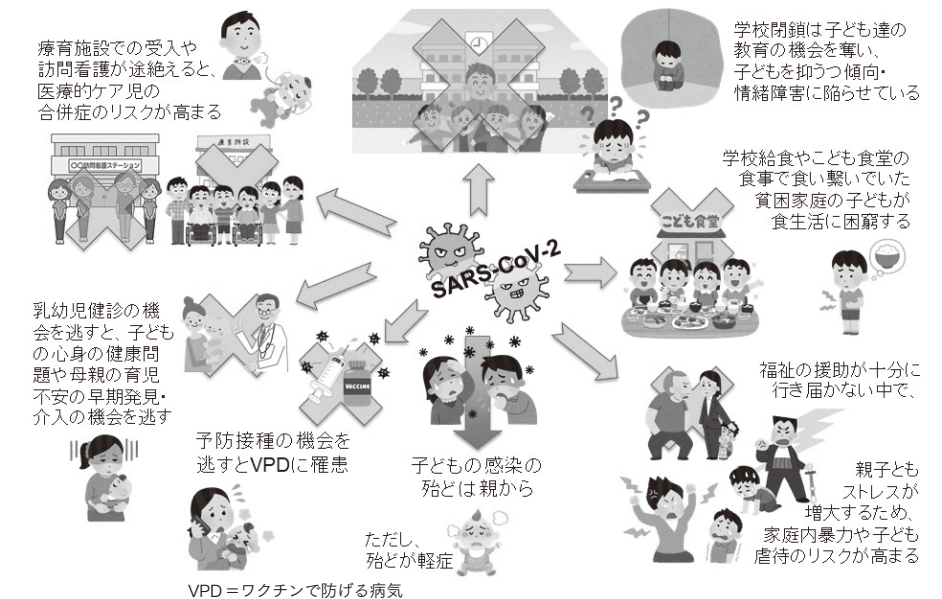
### 子どもたちの生活への多大な影響

#### ●生活リズムの乱れ

子どもたちは、朝起きても行くところがない、することがない、友だちと会えない、遊ぶことや体を思い切り動かすことができないなど多くの制約の中に置かれて

### 図表●子どもの COVID-19 関連被害

子どもは多くの場合、親から感染しているが、幸い殆どの症例は軽症である。しかし、COVID-19 流行に伴う社会の変化の中で様々な被害を被っている。



資料：「小児の新型コロナウイルス感染症に関する医学的知見の現状」森内浩幸・長崎大学大学院医歯薬学総合研究科小児科学教授、岡田賢司・福岡看護大学教授福岡歯科大学医科歯科総合病院 予防接種センター長（日本医師会 COVID-19 有識者会議のHPに掲載された図より）

います。このことは、教育・身体活動・社会的発達の機会を奪われるということの意味しています。心地よい体の疲れがなければ質の良い睡眠をとることは難しく、気持ちよく目覚めることも難しくなってきます。睡眠リズムが乱れ、身体活動が損なわれれば食欲もなくなってきます。あるいはすることがないので1日中何かを食べている（食べることにしかすることがないといった子どもも出てきています）生活では、極端な体重増加をきたすでしょう。困難を抱える家庭では、子どもはネグレクト状態に置かれ、生活リズム・食の変化などが危惧され、給食でしか栄養をとっていない子どもたちの体重は減少しているかもしれません。成長期にある子どもたちにとって、身長・体重の伸びは子どもの健康のバロメーターです。身体の実態調査のためにも、毎年学校で行われる定期健康診断、体力・運動能力測定は少なくとも年度内に行われることが必須だと思います。

#### ●心の成長への危惧

卒業式、入学式、集団生活を体験することは、教育だけでなく、子どもたちの心の成長を促しています。その積み重ねが思春期の自己（アイデンティティ）を組み直す作業に欠かせないのです。

### ●SOSを出せない子どもたち

児童虐待の増加に歯止めがかかっていない中で、子どもが家庭にいることが危険な場合が少なからずあります。学校や部活の時間が唯一これらの危険から身を守ってくれる時間だからです。虐待する保護者も失職したりテレワークで在宅時間が長くなっていますので、子どもはますます危険にさらされているのです。保育所や学校が子どもの安全を確認していた場所であることをあらためて認識し、子どもがSOSを届けやすい仕組み、子どもを助け出せる仕組みをたくさん用意する必要がありますでしょう。

### ●ネット依存症の増加に対する危惧

緊急事態宣言が解かれた地域、学校が再開する地域との教育格差はどうするのでしょうか。文部科学省のGIGAスクール構想がこれを機会に一気に進みそうですが、その内容・効果・弊害は慎重に見ていかなければならないでしょう。

オンライン授業が受けられて、朝から制服を着て規則正しい生活を過ごせる子どもたちがいる一方、ずっと画面に向き合い、部活もオンラインで行う生活に目が疲れる、肩こりがする、頭痛など過剰な刺激への身体の悲鳴が聞こえてくることも稀ではありません。子どもの身体を丸ごと配慮することが切に望まれます。そのためにも効果と弊害をしっかり検証することが大切です。

### ●ゲーム障害激増の危惧

ストレスが溜まってくると、建設的なことで解消するよりは、安易で楽しい方法でその場から逃避することを選びがちです。2019年に新たな疾患として認定されたゲーム障害が増加することが危惧されます。予防、今後の調査結果が見逃せません。

## 子どもたちはいま 家族が家庭にいる時間が増えて

学校、部活、塾に忙しかった子どもたち。仕事仕事でほとんど家にいなかった保護者。自粛、テレワーク、失職、理由はさまざまですが、家族と一緒に過ごす時間が圧倒的に増えています。一緒にいるのでストレスが増えた、食事の支度が大変、などマイナスの面ばかりではなく、一緒に過ごすことで子どもの姿が見えた、助け合った、お手伝いが増えた、動画を見ながら一緒に筋トレをした、家でできる趣味を見つけたなどプラスの面に目を向け過ぎている家族も少なくありません。ネットで品物を購入したり、料理の手順を覚えたり、草花の手入れ方法を知ったり、今まで与えられたことをこなす時間だったことを自ら自分で何かをする時間に変えて過ごす時間の使い方を発見している姿も多く見受けられます。

### ●学習する場の広がり

オンライン上で、学校や塾の授業が配信される、無料の講座が配信されるなど学習する場と時間の広がりが示されています。身体に弊害が出ないように上手にネットを活用するいい機会にもなるでしょう。さらに、やはりネット上ではうまく伝わらないこと、子ども集団における役割を果たせないこと、実際に学級という集団の方の必要なものなどが明確にわかっていくというメリットもあり、この感染症からある程度解放される時期に向けて、ある種の教育実験をしている期間と認識して、子どもを主体にした工夫が各分野で行われることが期待できます。

## 子どもたちの不安・懸念は周囲の影響を受けやすい

災害時などの経験から、ことさらにそのもの子どもへの影響もありますが、ことさらに対する周囲の大人の意識・行動の取り方からの影響も大です。ある出来事はどう認識するか、その認識に基づいてどう行動するか、大人の影響は大であることを考えれば、英知を尽くして前向きに乗り越えていくことが重要です。子どもの新しい発想に耳を傾けることも重要です。

PTSG (Post Traumatic-Stress Growth=心的外傷後ストレス成長) とは、大きなストレスに見舞われた時に、問題を他者や環境のせいにするのではなく、自分の問題として受け入れ解決策を模索することによって、人として成長するという意味を意味しています。苦しい時こそ、成長の機会になるという考え方であり、実際に苦難をバネにして成長した人生の物語は少なくありません。起きてしまったことは変えることができませんが、どう対処するかは変えられます。

まさに、ピンチはチャンスでもあるのです。たとえば、学校に行くことがあたりまえだと思っていたが、進路を絶たれる状況になって初めて自分が本当に学びたいことがわかり、努力して学業を継続することができたとか、与えられた課題をこなすだけの時間を自ら積極的・主体的に取り組む時間に変えたなどです。戦争、災害、事件、避けられないような不幸な出来事の後でさえも、人は成長できるということを知っておくことも大事なことでしょう。

人類は、ペスト、スペイン風邪、麻疹などの感染症といつも隣り合わせでした。今後も新しい感染症に見舞われることでしょう。今回の新型コロナウイルス感染症は、科学・情報網が発達した現代社会において世界中の英知が結集し、本当の意味でグローバル化した社会へ飛躍する機会になるかもしれません。